

Title	雲南に於けるドンソン文化の問題：晉寧石寨山遺蹟
Sub Title	Problems of the Dong-Son culture in Yun-nan
Author	近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.1 (1959. 4) ,p.67- 93
JaLC DOI	
Abstract	Recently, at the Shih Chai Shan (石寨山) site in Yun-nan (雲南), South-West China, a certain number of metallic drums have been discovered. They are the most typical remains of the Dong-So'n culture. The writer believes that these drums can largely be divided into two groups from a functional point of view. Those that seem to have a full function of the musical instrument form the first group, and those that appear to have no such function form the second. The drums which come under the first group are characterized by their shape and the ornamental figures of bird-men, boats, flying birds, circles with tangents, zigzag-filled bands, central star and so on, engraved on the surface and around the body. They belong to what Heger called Type I. The second group can be distinguished from the first for the existence of various human and animal figurines and small drums casted on the beating surface: this character deprives the drums of this group of any musical function. They may be considered as mortuary instruments. Probably, the writer supposes, the second group drums are derivations from the first group ones. By considering the correlation between the metallic drums and other bronze remains, and by their typological studies, the production of the first group drums can be dated to the Chan Kuo (戦国) period, between the 4th and the 3rd centuries B. C. This can be related to the south-ward penetration of the Ch'u (楚) culture of the Central China. The second group drums seem to belong to the Han (漢) period from the 2nd or the 1st century B. C. They can be considered to have some connections with the Han culture of the North China. The derivation and the development of the second group drums, which served as mortuary musical instruments, can easily be understood, when we think of the contact between the culture of the Han dynasty following the conquest of Emperor Wu (武帝) and the aboriginal Dong-So'n culture. From the viewpoint of mortuary use of these instruments, we can recognize a certain resemblance between the second group drums and the small drums of the Dong-So'n site in North Indo-China. And the writer thinks that this accidental resemblance is an extremely interesting phenomenon in the cultural aspect of history.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590400-0067">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590400-0067</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 雲南に於けるドンソン文化の問題

## — 晉寧石寨山遺蹟 —

近 森 正

### 序

最近、雲南省晉寧石寨山墓葬遺蹟から出土した「銅鼓」が、明器的な用途を示す状態で発見されたことが注目されている。<sup>(1)</sup> 銅鼓の用途に關する論考は、この分野における重要な課題として、はやくからとりあげられてきたが、一九〇四年、de Groot が、湖南省において雲雷文の銅鼓を発見したことから、銅鼓が雨乞の式に用いられるものであるとしたのを始めとして、<sup>(2)</sup> F. Hirth は、漢の馬援が銅鼓を製作したという後漢書馬援傳の記事を採用し、その支配のシンボルとして用いられたとした。<sup>(3)</sup> 而して一九二四年から二八年にかけて行なわれた Pajot の北ヴェトナム・ドンソン (Dong-Son) 遺蹟の發掘は、銅鼓研究を一步前進させることになった。この重要な資料に立脚して、一九三七年 V. Goloubew の論文が發表された。<sup>(4)</sup> 彼は銅鼓の文様に描かれる船、鳥、羽人等の圖から北ボルネオのダヤク族との關係を想定し、銅鼓の用途に葬式説を提唱した。しかし、ドンソン遺蹟の發掘は、從來まつたく不明であつた銅鼓の年代に、その據を與えたことに大きな意義が認められる。即ち、彼は漢代遺物、殊に王莽の鑄た貨泉を伴出したことからドンソン遺蹟が西紀一世紀頃に屬することを説き、銅鼓の年代を、この時期に比定させたのである。ところが、ドンソン遺蹟

出土の銅鼓は、明らかに Heger 第一型式の形態をもつものでありながら、これを典型的な第一型式とされる Ngoc-Lu 寺銅鼓などと比較すると、あまりにも小型であり、文様も便化している。ドンソン文化（銅鼓を標式とする東南アジアの青銅器文化、銅鼓文化）としては、むしろ退化型式であり、非實用的な明器としての銅鼓であると考えられる。

V. Goloubew の誤謬は、小銅鼓をも含めて第一型式銅鼓の年代を考定したことであつた。とすれば、Heger の第一型式銅鼓は、<sup>(5)</sup>V. Goloubew のいう年代を遡らせて考えなければならぬ。勿論、それは第一型式銅鼓の年代の或時期を示してはいるものゝ、その上限年代を指示するものと考えすることは出来ない。この點に（ついで）Heine-Geldern は、<sup>(6)</sup>銅鼓の中に大型のものと小型のものが存在し、ドンソン遺蹟出土の小型銅鼓は退化型を示めしているものであつて、銅鼓は、それより以前から發達したものであると論じ、その用途については、V. Goloubew の葬式説に、更に財富、貨幣の役割を想定し、つけくわえた。そして銅鼓の文様を、ハルシュタット文化、ダニユーヴ、コーカサス地方との關係を考えて、中央アジア—四川—雲南—ドンソンという假説的な文化傳播系路を説き、前八世紀頃の年代を考えた。しかるに、一九二四年、B. Karlgren は、これを批判する論文を發表した。<sup>(7)</sup>すなわち、彼はハルシュタット、ダニユーヴ、コーカサスの青銅器文化が、ドンソンに流轉する際に、オールドス、淮河青銅器文化を媒介したことを、銅鼓の文様モチーフの一つ一つについてオールドス、淮河式銅器の中に類似を求め、戰國期、前四、三世紀を以つて古い方の銅鼓（初期ドンソン文化）の年代とした。彼もドンソンの小銅鼓は、Heger の第一型式銅鼓と同じであるが形が小さいことを指摘している。このように Heine-Geldern, Karlgren の研究では、一應、小銅鼓を大型の所謂第一型式銅鼓から除外して考えるようになった。これは銅鼓の上限年代を考察する上に重要な契機であつた。しかしながら、それでは、この小銅鼓が如何なる性格をもち、如何なる社會的、文化的情況のもとに發生したものであるか。こうした疑問に

對して何ら答えるところがなかつた。たゞ Heine-Geldern<sup>(7)</sup> 及び、小林知生氏<sup>(8)</sup>によつて、ドンソン遺蹟出土の小銅鼓が、銅鼓の盛行期を過ぎた後の所産として見解が示めされたにすぎなかつたのである。

從來のドンソン文化の研究は、とかく特殊な遺物のみに集中し、遺蹟を離れて特定な或一種の遺物を對象として、その分布なり、系統、或は傳播經路を求めるといつた、いわば一文化要素の系譜を辿る研究が主であつた。しかし、これを基にして次の段階には、遺蹟に即した文化構造の內的連關を問題にする研究がなされなければならない。この研究が遅れているのは、東南アジア地域における科學的な發掘調査が充分行なわれなかつたことに起因するものであろうが、ドンソン遺蹟及び、こゝに問題にしようとする雲南の石寨山遺蹟は、ともに從來、單獨に發見されていた各遺物に有機的な相互の關連性を與えうる點に意義が認められる。シナ青銅器文化と深い關係を有するこれらの遺蹟において、シナ青銅器文化の東南アジアへの波及という事象を單に年代考察の傍證としてとりあげるばかりでなく、文化現象として改めて考えなおさなければならぬと思う。シナ民族の進出に對して原住民族がどのような動きを示めしたか。シナ文化と原住民族文化とは、相互にどのような型で觸れ合つたか。これらは、いまの研究段階ではきわめて困難な問題であり、ひとり考古學の課題にとどまるものではないが、考察の足がかりなりとも求められないであらうか。銅鼓の用途についても、たゞ一つの用途を選び出すことは、ほとんど意味がないと思う。その時期、その場所における文化情況の上に、それぞれの用途が考えられてよいのではなからうか。

なお、近年の新中國の考古學調査にはめざましいものがあり、長沙、壽縣など戰國期の楚に屬する地域、四川省各地の巴蜀青銅器文化など、シナ青銅器文化の中にもそれぞれ地方色を有する文化が明らかにされてきている。これらの成果を活用して新たにドンソン文化とシナ青銅器文化との交渉をみなおす必要があると思ふのである。

## 一、石寨山遺蹟の概要

石寨山遺蹟は、雲南省晉寧縣城の西、約五杆、滇池の東約一杆の地點、比高約二十米の滇池に臨む小丘陵上にある。この遺蹟の發掘調査は、一九五五年三月に孫太初ら雲南省博物館の手によつて行なわれ、「考古學報」一九五六年第一期(第十一冊)誌上にその概要が報告された。<sup>10)</sup>その後、一九五六年十一月再び調査が繼續された。<sup>11)</sup>まだすべての遺物が分類報告されてをらず、今後、精細な報告が發表されるものと思われるが、現在までに知られる石寨山遺蹟の概要は次の如くである。

まず、石寨山丘陵上中央部と、西北に偏つた地點乙區に、新石器時代遺蹟が發見され、褐色土層及び貝層中より泥質紅陶、夾砂灰陶、夾砂黃衣陶、夾砂橙黃陶の各土器片、土製紡錘輪、磨石斧、有肩石斧、石鏃、石錘、骨角器及び屈肢葬人骨が出土した。

而して、この遺蹟の東、丘陵の東面沿邊一帶の地點甲區第一トレンチにおいて、地表下一六〇厘米前後の深度に、長方形の土坑墓二座を發掘した。その第一號墓は、東西偏南十四度方向に、全長三・三四米、幅二・七二米。第二號墓は、長さ一・四米、幅〇・八米の短小な墓道を伴い、第一號墓と同じく東西偏南四度の方向に幅一・八米の長方形をなすが、全長は後世の破壊を受けていて知ることが出来ない。此の外、甲區第二トレンチ内にも、いくつかの墓葬が發見されたが破壊攪亂されて構造を明らかにしない。其の後、一九五六年の繼續調査の際にも數座の土坑墓が發掘されている。これらの墓葬群より出土した副葬品は、青銅器を主とし、鐵器、金製品、石器、土器、漆器、木製品等、總計三千百余點に及ぶ。

(青銅器) 農工具：犁鋤、斧、鎌形器、紡輪、鏟、鑿。兵器：戈、矛、劍、斧鉞、刺兵、鏃、弩机、又、刺錘。樂器：銅鼓、(虎耳四足器)、銅鼓形飛鳥四耳器、銅鼓形四耳器) 編鐘。日常用具：洗、鏃斗、釜、壺、盃、勺、燠炉、削、耳杯扣。裝飾品：手鐲、鍍金帶鉤、銅鏡、舞俑騎士小像、杖頭銅俑、鈴。車馬具：銜、鑣、冒、鈴、轡頭。明器：銅房子、俑、牛頭。其他：銅印(「勝西印」)釘。

(鐵器) 銅柄鐵劍。矛、劍、斧。

(金製品) 圈狀裝飾品、珠子、扁葫蘆形墜子、釧、夾、鈕扣、梅花形飾品、壓花簪形殘片、劍鞘、又、手鐲、金製印章(蛇紐「滇王之印」正方形、二・四×二・四、高六一・八、一・八、一・八)

(土器) 陶豆、陶环、陶竈。

(石器) 穿孔石墜、圭形石墜、石耳環、石环。

(漆器) 耳環、漆奩、漆箱。

(木器) 木环、木質殘片。

(玉) 玉帶鉤、玉璧。

(貨幣) 貝貨、半兩錢、五銖錢。

以上が報告された出土品目の全てであるが、記述が簡單で、出土状態その他詳細な點については不明な部分が少なくない。

## 二、石寨山青銅器文化の年代と文化系統

石寨山墓葬群遺蹟より出土した遺物には、以上の如く非常に多くの種類が見出されるのであるが、これらが銅鼓と共存し、所謂一括遺物を構成している點に注意せねばならない。銅鼓は、これが廣く東南アジアの古代遺物として、早くから研究の對象として注目されてきたものであるだけに我々の興味をひくのである。以下、主要な遺物に就いて、本遺蹟の年代、及び文化系統を考えてみたい。

(鼓形器)

### (1) 銅鼓 PL.1.

甲區第一號墓の西壁側の下面に貝を中に満たした銅鼓が二點、相重なつて出土した。上部にあつた銅鼓は土壓によつて破損を受けているが鼓面は比較的よく残つている。下部にあつた銅鼓は、ほぼ完形である。この鼓の形狀は、Hegerの分類<sup>(12)</sup>によれば、第一型式に屬するものであり、聞宥の「銅鼓圖錄」の乙式に該當するものと考えられる。胴部が三區に分れ、上部は非常に膨らみ、鼓面が突出する。中央部は細くなつて、下部に至つて擴がる。下部は截頭圓錐形を呈している。上部と中央部との間に双股繩文を施した四つの把手が附く。鼓面は、中心部に九角の放射線狀星文が描かれ、外周に向つて第一、三、五、七暈は、連續鋸齒文、第二、六暈は、圓渦文(圓と接線文)を以つて構成される。第四暈は、巾が廣く、長い嘴をもつた「サギ」科に屬すると思われる水鳥の飛ぶ圖が四つ、それぞれ中間にフクロウの如き鳥が四つ配される。胴部は、上から第一、三、六、八暈が連續鋸齒文、第二、七暈が圓渦文(圓と接線文)で構成される。第四暈は、縦に六つの部分に區切られて、船首と船尾が上反し、その上に鳥の置かれた船にそれぞれ羽のついた人

物が四人乗っている圖が配される。第五暈は、同じく縦に二つの部分に分かれ、各部に舞う羽人が各々一人、その中間に二艘の船が置かれ、左の船の中には、二羽の鳥が、右の船には、二人の羽人が坐して乗っている。この二艘の船の間には角の、大きな水牛があり、その背の上に鳥が一羽乗っている。鼓面と胴部に施される鋸齒文は、二組が互いに相對し、二暈で一組を構成する。本銅鼓の高さは二十三糎、鼓面直徑四十糎、底徑四十四糎である。

(2) 銅鼓形飛鳥四耳器 PL. 2—上

中に貝を一杯満たした状態で出土した。これは、銅鼓と全く同じ形態をしているがやゝ小さい。又、底をもつことは、銅鼓と大いに異なる點として注意せねばならない。鼓面上には、二・五—六糎位の高さの銅製人形が十八個、犬が一個、鶏が一個ついている。この十八個の人形のうち男性が三、女性が十五個である。女性像のうちで最も大きいものが、方形の臺の上に坐して中央にあり、その後方に杖を持つ男性像が一人待衛する。前方には、盤を捧げ跪立する者があり、中央の女性像にかしづいているものゝ如くである。その外側には、麻を織る人物が並らんでいる。これらの人物の結髪は、長く編んで背中にたらすもの、後頭部で丸く結ぶものなどがあり、風俗及び機織りの形式などとともに西南夷民族の生活を表現したものと考えられる。胴部には、淺刻の孔雀の圖が四羽描寫されている。頸部と胴部との間に、銅鼓の場合と同じく双股の繩文を施した耳が四つ附着する。又、胴部下方に、鑄出した孔雀が四羽附けられている。本器の高さは、二十一糎、口徑二十四・五糎、底徑三十一糎である。

(3) 銅鼓形四耳器 PL. 2—下

銅鼓の右側に貝を一杯満たして出土したが、形状、大きさともに前記、銅鼓形飛鳥四耳器と同じである。たゞ、これには孔雀の裝飾がない。鼓面上には、高さ五糎に満たない銅製人形が四十一個、犬一個、猪一個が置かれる。中央には、



高さ九糎ほどの圓柱が立ち、その上に龍虎が附されている。柱身には龍蛇が二匹からんでいる。四十一の銅製人形のうちは、裸體で髪を亂して板の上に釘づけされたもの、その右側に刀を持つて立ち、刑を行うが如きもの、跪くもの、手足を縛られ、地上を曳かれるもの、薪を擔ぐもの、籃を提げるもの等があり、祭祀、人身供養の様子を表現するのはなからうか。胴部には、線刻の人物が八人、手に手に斧、矛、弓等の武器を携えて並ぶ圖が描れてあるが、當時の西南夷諸族の狩獵の姿、或は兵士を表わすものであろう。なお、注目すべきは、鼓面の左右對象位置に二つの小銅鼓が置かれてゐることである。

(4) 虎耳四足器 Pl. 3.

おなじく貝を器内に満たした状態で發見された。形態は、銅鼓に類似するが、全體としては桶形を呈し、胴部が稍々細くなる。胴部に二個の虎が把手として、左右に相對してつく。底を有し、四個の足がつく。上面には、中央部に小銅鼓が置かれ、その鼓面上に角の大きな牛が立つ。周圍には、六頭の牛が配される。胴部には、線刻による雲形帶紋と寫實的な虎の圖が描かれる。高さは、二十五・五糎、口徑二十四・八糎である。

なお、全く別個體であるが、銅鼓の上面に女性の俑がのせられて出土した。これは兩手で一本の銅杖を持ち、跪坐する高さ四十三糎の人形で、長い髪を背中まで垂らして結んでいる。耳に大きな圓形の耳飾をつける。銅鼓形飛鳥四耳器、銅鼓形四耳器、各鼓面上にみられた人物像と相通ずるものを持つてゐる。

さて、以上四種の鼓形器に共通する點は、まづ第一に、出土状態からみて、墳墓に副葬されたものであること。特に、銅鼓形飛鳥四耳器、銅鼓形四耳器、及び銅鼓上の女性俑に葬禮的な意味が考えられる。第二に、それらは、内部に當時の貨幣と考えられる貝(14)を満たしていること。第三に、これら形態的な祖形を、シナ青銅器文化に求める事が出来ないこ

とが指摘される。

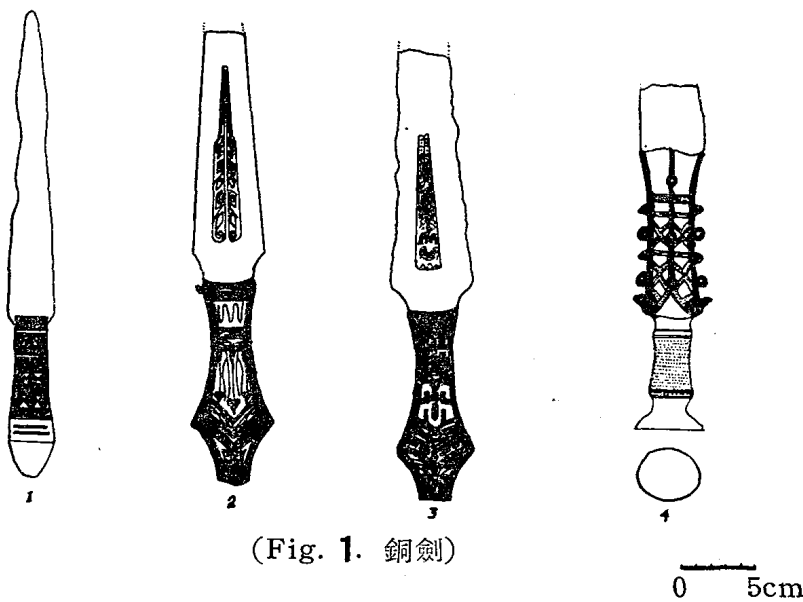
次に相互の相異点については、まづ器形上よりみれば、銅鼓、銅鼓形飛鳥四耳器、及び銅鼓形四耳器は、全く同一であるが、圓渦文（圓と接線文）、鋸齒文、放射線狀星文、水鳥の飛ぶ圖、羽人と船の圖は、銅鼓のみに認められるもので、他の三器にこれを見ない。これは、所謂「銅鼓文」といわれる一群の文様であつて、東南アジアに於けるドンソン文化個有の所産である。第二に、銅鼓形飛鳥四耳器、及び銅鼓形四耳器は、銅鼓と同一形態を持ちながらも、鼓面上に銅鑄人形を附け、底を有する等、樂器としての機能を全く失ない、葬禮的な意圖を伴い、明器としての性格を強くうちだしている。これらは本來的に明器として製作され、使用されている。それに對して、銅鼓は墓中に副葬されてはいるが、形態上、樂器としての機能を充分に保有しており、副葬される以前において、樂器としての使用に堪え得たと考えられるものである。この點において、文様モチーフ上の相異とともに、前二者と銅鼓との機能的な相違を指摘することができる。第三に、銅鼓形四耳器の鼓面上の左右二個の小銅鼓、及び虎耳四足器の上面中央部に置かれた小銅鼓は、形態上よりみれば明らかに Heger 第一型式に屬するものであるが、大きさは、僅かに四纏前後に足らない全くの非實用器であつて、明器の裝飾品の一部として作られたものである。恐らく、前記銅鼓のミニアチュアであろう。ドンソン遺蹟からも、これに類似する小銅鼓が出土している。<sup>(15)</sup> 虎耳四足器は、鼓面中央部に小銅鼓を置き、鑄造の銅牛をのせるなど、銅鼓形飛鳥四耳器、銅鼓形四耳器等と同様な意義を持つものと思われる。器形は、他の三者に比し、稍と細長いが、胴部は銅鼓と同じく、三部に分たれ、その基本形において共通する。たゞ銅鼓形に比し、胴部が細長くなり、胴上部における膨らみを失し、把手が虎の形象に置き變えられ、さらに四足を附すなど、明器として他の三者よりも一段と定形化し、完成した形態を示めているものと考えられる。胴部に施された雲氣文は、他の器にみられないシナの要素を表

現している。これは長沙などの戰國後期、前漢期の墳墓から出土する漆器、彩畫銅器に盛行するモチーフと同一であつてシナ文化の影響が認められる。

銅鼓、銅鼓形飛鳥四耳器、銅鼓形四耳器、及び虎耳四足器は、型式學的方法によつてこれら四者の間に、内面的な連繋があることが知られるが、機能上よりみれば、二つのグループに分けることができる。即ち樂器として、實用に堪え得る形態を有する銅鼓と、完全に明器として定形化した銅鼓形飛鳥四耳器、銅鼓形四耳器、虎耳四足器の類である。そして後者のグループは、銅鼓をオリジナルタイプとして、變形、明器化した過程を考え得る。又、後者のグループの中でも虎耳四足器は、他の二者よりも一層、明器として發達したものである。即ち銅鼓を基本形態として發生した鼓形器類の中でも、その基本形が、なお明瞭に指摘し得る銅鼓形飛鳥四耳器、銅鼓形四耳器の方が、全く新しい形態を生じた虎耳四足器よりも古い時期の所産であると考えられる。そして虎耳四足器の發生過程中に戰國後期乃至前漢期シナ文化の何らかのばたらきかけを認める。而してこれら鼓形器の間に、一應形態上の發達過程を想定し、その過程に年代的な時間の幅のあることを考えしめるものである。

(銅劍) Fig. 1.

銅劍は二十二口、及び銅柄鐵劍四口を出土した。これらは以下の如く



(Fig. 1. 銅劍)

四類に分類し得る。

第Ⅰ類—柄頭の断面が圓形をなし空心である。刃のねもとが廣く、柄は圓筒狀である。圓渦文（圓と接線文）、連續鋸齒狀文、及びS字狀渦文など、所謂銅鼓文がみられ、銅鼓と共通である。長さは、三十五纏〜二五・五纏である。（Fig. 1-1）

第Ⅱ類—柄頭は、鈍角の人字形である。柄の上に斜線文、雷文、廻形線文、絡繩文などを施す。長さ四三纏〜十七・五纏（Fig. 1-2.3）

第Ⅲ類—柄頭の断面が圓形をなし、凹みを有する。刃部に背稜を持つ。關に近い部分が擴大して突出する。本類と全く同形のもがドンソン遺蹟から發見されている。<sup>(17)(18)</sup>長さ二十八纏前後。

第Ⅳ類—（銅柄鐵劍）青銅の柄に鐵の刃部をはさむ。柄の上に格子目狀文、突起文、連珠文などを飾る。形は他の類よりも大きいが刃部が鐵であるために殆んどが酸化腐蝕している。最も長いもので約五〇纏前後である。（Fig. 1-4）

第Ⅰ類銅劍の柄上に施される圓渦文（圓と接線文）、連續鋸齒文は、他の三類に認められず、本遺蹟出土の銅鼓と全く共通するものであつて、兩者の關係が密接であることを示めしている。第Ⅰ類銅劍は他の銅劍に比し、最も單純な形をもち、巴蜀青銅器文化に同形態を見出すことができる。第Ⅱ類銅劍の身の形態は、第Ⅰ類と殆ど異なる所がないが、刃のねもとと柄部の境が、第Ⅰ類では圓みをもつてゐるが、第Ⅱ類では、それが逆の孤をもつものに變化し、鈍角を以つて刃の線と交わる。これが第Ⅲ類では、一層發達し、突起狀に突出して、鏢を形成する。この第Ⅲ類のタイプはシナ青銅器文化の領域に類例をみないものであり、トンキン地方、ドンソン遺蹟に多いことから、<sup>(17)(18)</sup>ドンソン文化圈において發達をみたものと推される。首の部分は、第Ⅰ類では圓みを帯びてゐるものが、第Ⅱ類では、張り出して人字形をなす。

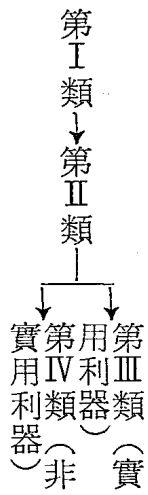
第三類と第四類の首は同形である。第四類は青銅器文化期から鐵器文化期への過渡的な時期を表現するものと考えられる。

鑄造鐵器の使用は中原では相當古く存在したことが云はれているが、それが廣い地域に及ぶのは、漢代に到つてからである。

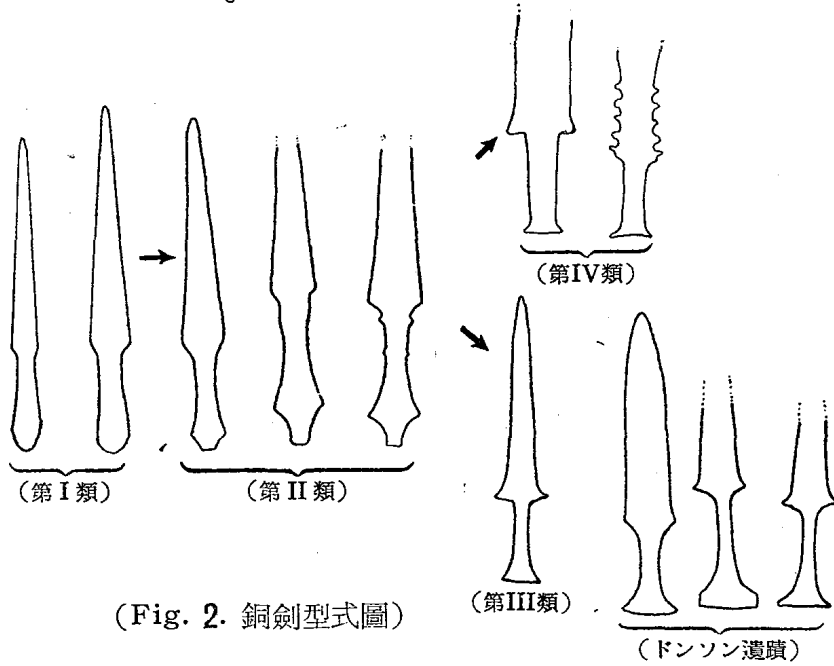
本遺蹟出土の鐵器（銅柄鐵劍）

が漢代に屬するものであることは、最近、黃展岳<sup>(19)</sup>によつて指摘

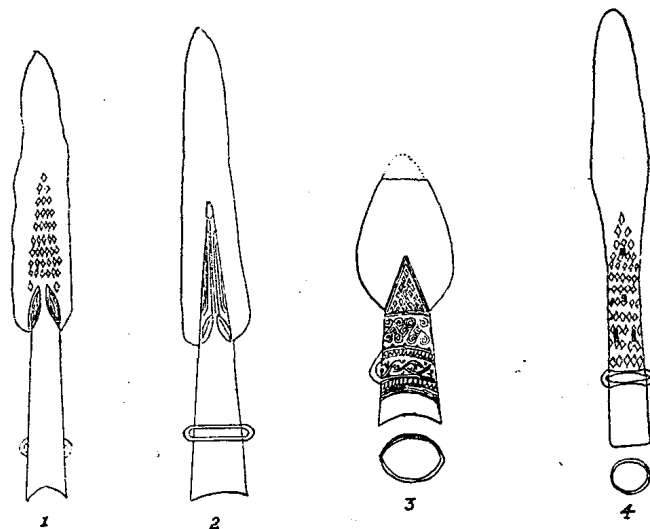
されたところである。本類が非常に裝飾に富んだ形式を含むことは、非實用的な用途に於てられたものであることを思わせる。以上の觀察から



と變形發展の推移を辿ることが可能である。(Fig. 2.)



(Fig. 2. 銅劍型式圖)



(Fig. 3. 銅矛)

0 5cm

そして第Ⅰ類が銅鼓と同時性を示めし、第Ⅳ類が漢代に至ること、第Ⅲ類の鏢の張り出した形式がドンソン遺蹟のもの  
と同一タイプに屬すること等の諸點を注目しておく。なお、ドンソン遺蹟にみられた桃氏劍の類は、本遺蹟からは一例  
も報告されていない。

(銅矛) Fig. 3.

銅矛は、全部で十一例出土し、これを四類に細分する。

第Ⅰ類—刃が短く、もとの幅が廣い。圓形に近い刃である。袋穂も同じく短い。刃と袋穂の長さは全長のほぼ二分  
一である。莖部の上に耳が一つ附着している。文様は圓渦文(圓と接線文)連續鋸齒文、及び菱形鱗文によつて構成さ  
れ、袋穂上に施される。全長十四・五糎。(Fig. 3—1.3)

第Ⅱ類—刃、袋穂とも細長く、その境は明瞭で袋穂の底部にアーチ状のえぐりがある。背上に、雷文、菱形鱗文等の  
文様が施される。莖部の兩側には一乃至二個の耳がつけられる。全長二十九糎—十五糎。數量的に本類が最も多い。  
(Fig. 3—1.2)

第Ⅲ類—刃の前半が幅廣く、先後に細まる。刃部と袋穂とは全長の二分之一の長さであるが境は明らかでない。莖部  
に二つの耳が付き、菱形の鱗文が施される。莖部末端のえぐりはない。全長二十四・五糎。(Fig. 3—1.4)

第Ⅳ類—刃が最も短く、莖部の約五分之一程度の長さであつて、鏢のような形狀をなす。全長二十糎。

第Ⅰ類銅矛の形態は殷後期のものに類似した形式をみるが、文様は銅鼓、及び銅劍第Ⅰ類と共通する所謂銅鼓文であ  
る。第Ⅱ類の文様は、銅劍第Ⅱ類と共通するものを含んでいる。袋穂の底部に深い切り込みを有するものがあるが、この  
類品が昆明附近で出土したものにみられる。第Ⅲ類は四川省寶輪院<sup>(21)</sup>、冬筍壩<sup>(21)(22)</sup>、成都羊子山 172 號墓<sup>(23)</sup>、長沙戰國墓<sup>(16)</sup>など、

所謂楚、巴蜀青銅器文化の戰國時期のものに同形のものが多い。第IV類は一例を出土するのみ他に類例がなく判断が困難であるため一應系列から除外した。従つて、第I類が、巴蜀青銅器文化にみられる形態を持ちながら、文様においてドンソン文化の系統であり、第III類も同じく巴蜀、及び楚青銅器文化系であつて文様は獨特である。第II類は、銅劍第II類と共通し、第I類の發展形式と考えられる。

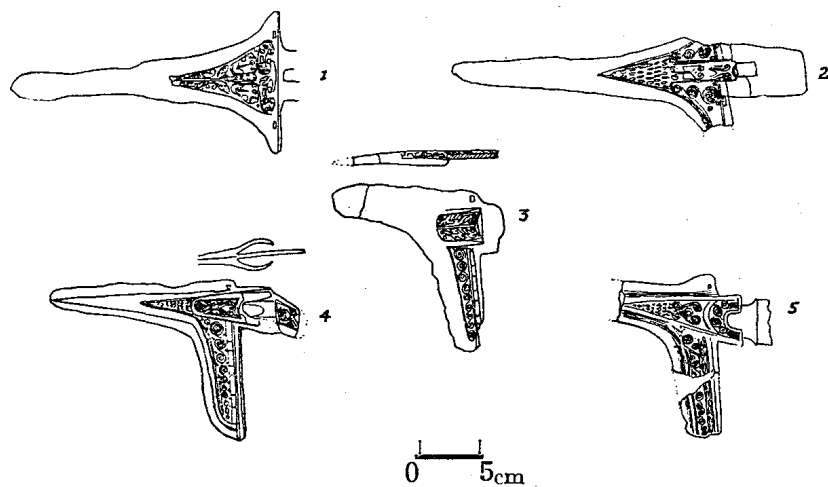
(銅戈) Fig. 4.

七例出土したが二類に分けられる。

第I類—胡が長く垂下し穿を四つもつ。援はやゝ短い。双翼の突起を援の部分に附すものがある。文様は援の末端、及び胡の上に施され、銅鼓、銅劍第I類、及び銅矛第I類と共通するモチーフである。この形式の戈は東周後期にもみられるが、長沙戰國墓、巴蜀青銅文化に盛行する。(Fig. 4. 1-2-5)

第II類—胡を持たないもので、刃のねもとが幅ひろいものである。援のもとの方と、内の上に文様が置かれる。銅劍第II類、及び銅矛第II類と同じ文様である。形態は巴蜀青銅器文化のものにみられる。(Fig. 4. 1-1)

小林知生氏は、ドンソン遺蹟に先行する時期において、シナ青銅器文化がインドシナに波及したことを示めず證據として、戈を問題にされたが、<sup>(24)</sup>他の青銅器文化圏に類似の銅利器の存在をみない以上、戈をもつてシナ青銅器文化の系



(Fig. 4. 銅戈)

統を受けたものとするのは問題のないところである。こゝに出土した戈の形状は、シナ銅戈の發達段階を反映するものであり、戰國期を降るものではないことは明らかである。

(斧鉞 (扇狀斧)) Fig. 5.

第I類—刃部が半月形を呈し、左右に大きく開いて兩端が内灣する。袋穗の横斷面は杏仁形、又は橢圓形をなす。大部分は左右對稱形であるが、なかには刃が非對稱形のものもある。(Fig. 5—1, 2)

第II類—刃部が撥形をなすもので、袋穗の横斷面は半圓、かまぼこ形をなす。

文様は兩類共通であつて、袋穗の上におかれ、圓渦文(圓と接線文)、連續鋸齒文、絡繩文、菱形鱗文によつて構成され、銅鼓、銅劍第I類、銅矛第I類、銅戈第I類などにみられたものと同一である。(Fig. 5—3)

(銅犁)

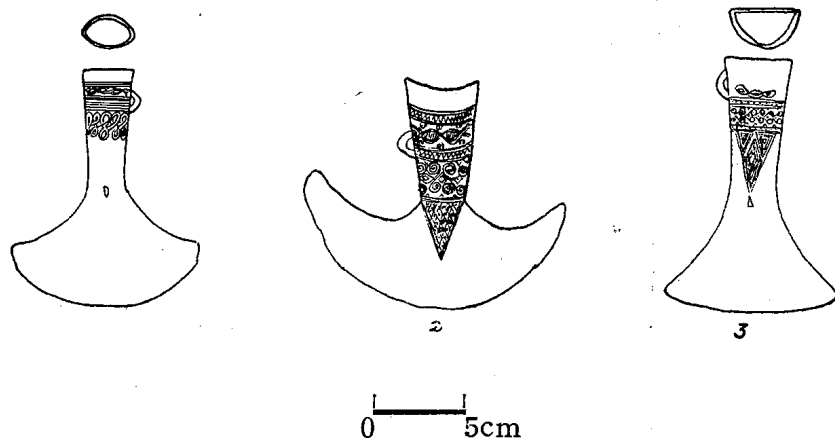
一例。一部破損しているが、刃の部分が銳角をなし、もとの方が圓形をなす。ほぼ卵形の犁頭である。斷面が三角形の袋穗がつく。全長二十六糎。雲南出土の同形品が O. Janse によつて報告されてお<sup>(25)</sup>り、ドンソン遺蹟出土品の中にもみ<sup>(26)</sup>られる。ドンソン・タイプの遺物である。

(銅鏟)

一例。長方形をなし、肩が丸い鍬先である。中央に半圓形の袋穗を持ち、その上に雷文が施される。左右對象の位置

雲南に於けるドンソン文化の問題

(八一) 八一



(Fig. 5.) 斧鉞 (扇狀斧)



に線刻による鳥頭と、牛頭の圖が各々一つ描かれている。鳥頭は孔雀であるらしく、銅鼓形飛鳥四耳器の胴部に描かれたものと同じ手法である。極めて細致で、寫實的な圖であり、裝飾的要素が強く、實用農具であるよりは小型明器としての性格がうかがわれる。全長十八・四糎、幅九・九糎。

(銅斧)

二例發見されているが、大きい方は全長十七・二糎。断面の方形の袋穗をつけた撥形の斧である。一面に長い髪を垂らした人間の頭の如き文様を、他面に龍の如き圖案化した文様、及び雷文が施されている。小さい方は無文で全長十二・七糎。

(銅鏡)

三面出土している。一面は直徑十六糎、前漢期に屬する方格四乳葉文鏡である。正方形の紐座を置き、篆書體で「畜思君王、心思不忘」の銘文帯がある。縁は内行の連弧文である。他の二面は直徑十糎で、文様は同じである。前漢に比定されるものである。なお方格四乳葉文鏡は、ドンソン遺蹟からも出土しており、銘文が異なるが注意すべき事象である。

(銅製牛頭)

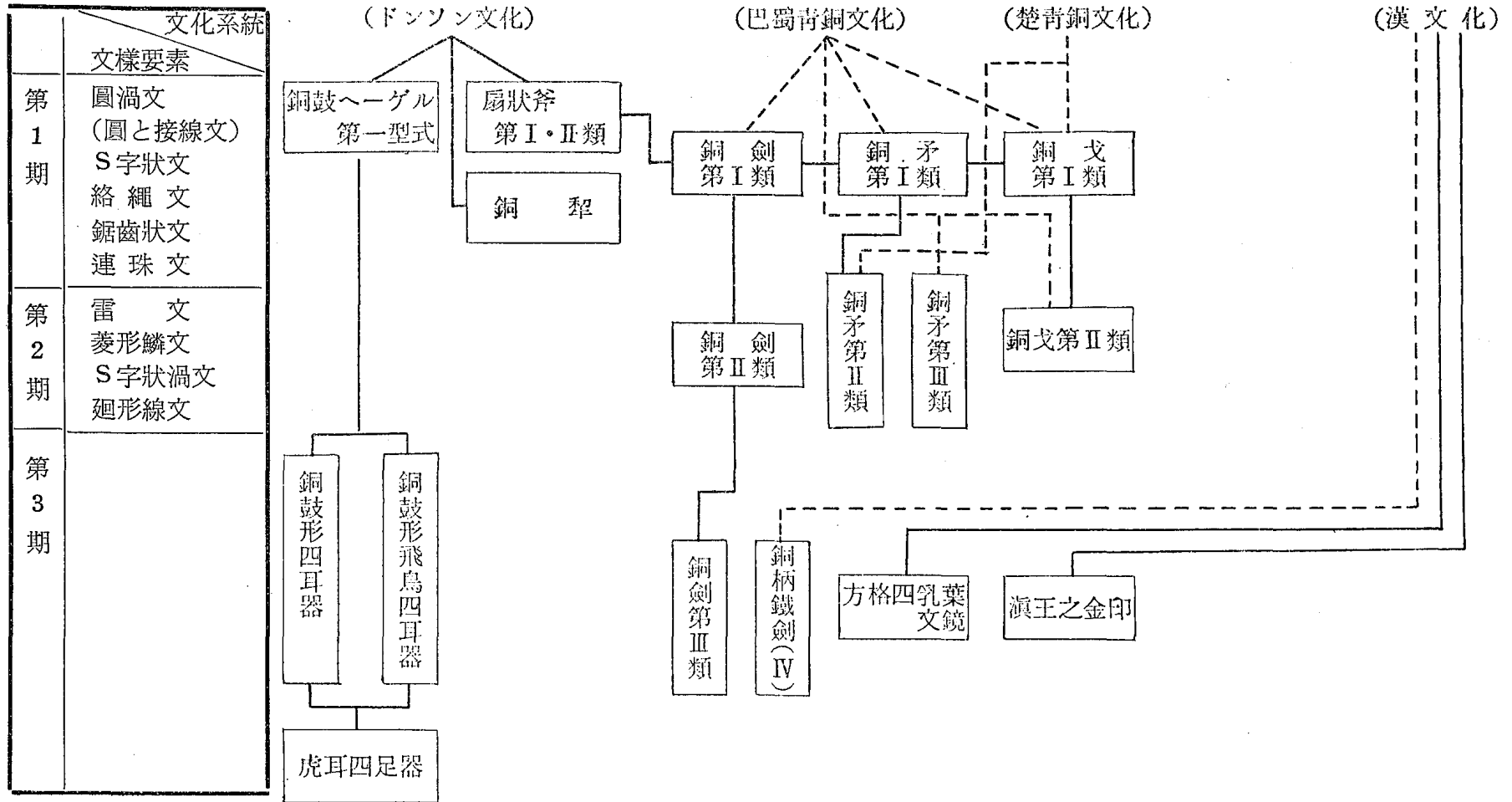
五點。虎耳四足器上の牛と類似する。恐らく副葬品として作られたものであろう。又、實際の牛の角が二例發見されているのをみても、この時期において牛が非常に重要視されていることが察知できる。

(杖頭かざり)

ウサギ、トリ、シカ、オウム等、鳥、動物類の俑、その他男女人物像の約七糎前後の銅製丸彫が圓筒の上につけられる。圓筒内に木質部が残っていることから、一種の杖頭の飾物、儀杖と考えられる。

以上、石寨山墓葬群遺蹟出土の主要遺物について觀察してみると、それらの間に形式上、先後關係のあるものが存在し、その發展系列を辿ることが可能である。さらにそれが年代的な幅を持つていることが考えられ、石寨山古墓葬群は、戰國期を上限として前漢から後漢に至つて營まれたものであることが推定される。しかるに、これら各種の青銅器を同地における内的發達のみで解釋することは殆ど不可能であることが知られるのである。勿論、それら青銅器の發達を一遺蹟で辿り得るといふことは、それが内的な發達を含んでいることを示唆するものにほかならない。しかしながら個々の遺物の最も單純な形態の示めす初期の段階についてみると、その型式の基づくところを他地域に求める必然性を認めるのである。石寨山遺蹟の各種青銅器は一面において濃厚なローカルカラーを有すると共に、一方においては外來文化、特にシナ青銅器文化の強い影響を受けている。そしてローカルカラーと考えられるグループの中にも、他の文化領域の廣ろがりの中で捉らえ得るものを含んでいる。(a)まず、銅劍第Ⅰ類、銅矛第Ⅰ類、銅矛第Ⅲ類、銅戈第Ⅱ類の形態は、四川省成都羊子山<sup>(23)</sup>、同じく昭化船棺墓<sup>(21)</sup>、冬筍壩船棺墓<sup>(21)</sup>、など四川省巴縣、成都盆地の成都、廣漢、新都嘉陵江上流地方の船形木棺、長方形木槨から出土する所謂、巴蜀青銅器文化に屬するものに近い。(b)銅戈第Ⅰ類、銅矛第Ⅱ類、銅葫蘆勺、鑿金耳杯扣、未地黒花の漆器類などは、湖南省長沙戰國墓出土の遺物<sup>(16)</sup>の系統をひくものと考えられ、楚文化との接觸を認めることが出来る。(c)方格四乳葉文鏡などの銅鏡、及び金印などは、明らかに中原漢文化の流入を示めしてをり、漢文化との關係、或は漢帝國と、その邊疆としての雲南との關係を窺うことのできる資料である。(d)圓渦文(圓と接線文)、S字狀渦文、絡繩文、鋸齒狀文、連珠文、及び菱形鱗文などは、楚・巴蜀のシナ青銅器文化になく、銅鼓、扇狀斧など、ドンソン・タイプの遺物と共通するものである。銅利器の初期段階において、形狀がシナ青銅器文化の系統をひくものでありながら、文様に、饗餐文、蟠螭文などのシナ文様を全く用いていないことは重要な點である。(e)寫

石 寨 山 遺 蹟 主 要 遺 物 編 年 系 統 圖



實的な鳥、鹿、兔、男女人物等の丸彫をつける杖頭裝飾、豹、虎等の動物形象は、遊牧系のアニマル・スタイルを想起させるものであるが、この文化系統を考え得るものかどうかは問題である。

右の分類と形式相互間の系統を考慮して圖示を試みた。

### 三、シナ青銅器文化との關係

「史記」百十六西南夷列傳に次の記事がある。

「始楚威王時使將軍莊蹻、將兵循江上略巴蜀黔中以西莊蹻者故楚莊王苗裔也、蹻至滇池地方三百里、旁平地肥饒數千里以兵威定屬楚欲歸報會秦擊奪楚巴黔中郡道塞不通因還以其衆王滇變服從其俗以長之。」これによると、紀元前四世頃、楚の將軍莊蹻が雲南の滇池に至り、支配者となつて、その他の風俗に化したと云い、この地方が楚の國と密接な關係を有していたことがうかがわれる。戰國時代、列強はそれぞれ、その周邊を開拓したが、楚の國は南方にあつて、その東南境、或は西南境に進出している。越の滅亡についで前三三九年から三二九年の威王の時に、この活動は特に盛んになる。これに類する記事は、このほか、漢書西南夷傳第六十五にもみられ、又、後漢書西南夷傳、華陽國志南中志、新唐書南蠻下松外蠻條にも、ほゞ同様の傳えがみえて、戰國時代、江南の楚が雲南地方に進出したことを記している。ところが和田清博士は、全く文献學的方法によつて、これらの所傳が、土民によつて傳えられたフィクションで、所謂傳説に屬するものであり史實とみなされないことを指摘された<sup>(27)</sup>。しかしながら、莊蹻の物語自体はともかく、たとえその年代的地理的な點に文献上の誤まりがあるにしても、これを文化的な事象として捉らえるとき、なお一考を要するものがあるように思われるのである。

O. Janse は、Karlbeck がストックホルムに將來した雲南の短劍を紹介しているが、この短劍は、全長十九糎、劍身の中一、七糎、断面菱形をなすもので、周禮考工記桃氏條に記載された青銅劍、近年調査された湖南省長沙、安徽省壽縣などの戰國期銅劍に類似する。駒井和愛氏によると、この Janse の報告する雲南の銅劍は、北方民族の劍、古代シナ人によつて輕呂劍と稱されたものと趣を等しくするもので、北方文化の侵潤を物語る資料であり、スキート・シベリア系青銅器文化に屬すると考えられるが、これがシナ式の劍に改變され、桃氏劍にまで發展させたのは、楚の國であると思われる。即ち、戰國時代の銅兵器が楚の國を媒介として雲南地方へ流入したことを推測せしめるものであるが、石寨山遺蹟の場合にもこうした現象が認められる。その發展の過程中に一定の楚文化の要素を包含していることは前章で指摘した如くである。要するに、この點を追究することは、當然、莊蹻の開滇という文献上の問題との連關を説くことになる。關係史料が殆んどみられない現在、困難な問題であるが、莊蹻の史料が如何なるものであれ、楚の文化の流入があつたことは確實であると云える。

巴蜀青銅器文化は、四川省巴蜀盆地を中心にひろがるが、歴史的にみて、この地が中原國家と接觸するのは、周の愼親王五年（秦惠文王後九年、紀元前三一六年）の巴蜀進出、及びその四年後に秦が漢中の地を楚から奪つてからのことである。實際の交通は、これ以前に存在したであろうが、しかし秦以前の蜀地には楚の勢力が及んでいたことが考えられる。従つて、少くとも前三一六年以前における巴蜀の地は、楚の歴史と深いつながりを有した事が推察される。最近の中國考古學が報ずる文物の上からみても、巴蜀と楚の青銅器は、互によく類似した様相を示めているのである。<sup>(30)(31)</sup>

前述した「史記」の記録に「以兵威定屬楚」とあるのは、彼等の統治者として部族的な國家をたて王を稱したと解される。次に「以其衆王滇、變服從其俗以長之」とあるが、所謂「其俗」は、滇池周邊の原住民の當時の習俗を指すものである。

う。「莊躋：變服從其俗」は、他に「没入蠻中」「用夏變夷」とある如く、當地の原住民との融合を指すものとみられる。莊躋云々の物語には、前にみたように問題があるが、これを、たゞ文化事象としてのみに考えるならば、こうした現象は、充分うかぐうに足るものと思われる。

石寨山遺蹟出土の各種銅利器の中、發達の初期の段階に屬するグループ、銅劍第Ⅰ類、銅矛第Ⅰ、Ⅱ類、銅戈第Ⅰ、Ⅱ類等は、それらの形態が、楚、或は巴蜀青銅器文化の銅利器の發展段階を反映し、細部にまでその形を承けながら、文様においては、銅鼓文の如き特色のあるものを附すなど、シナ青銅器文化の波及に對する同地での受容形態が現實に示めされたものと解すべきものがある。即ち、一群の初期段階の銅利器は、形態上、楚、或は巴蜀の青銅器文化の系統をひくものでありながら、シナ青銅器文様を採らずに銅鼓第一型式に共通する文様が施されていることは、文化現象としてどのように解釋されるであらうか。この相互の關係として、次の三つの場合が考えられる。

(1) 銅利器のグループと銅鼓の兩者は、ともに石寨山において、土着文化として、青銅技術の習得とともに自生的に同地に發生した。(2) 銅利器のグループが、巴蜀、或は楚の青銅器文化の波及として、同地に傳播導入され、その發達の過程中に銅鼓を發生せしめた。(3) ドンソン文化としての銅鼓が、すでに雲南地方に廣がつており、そこへ二次的に楚、巴蜀の青銅器文化が波及して、銅利器の各形式を傳播し、これを原住ドンソン文化の中へ同化融合せしめた。以上、右の三つの解釋のうち、(1)の場合には、兩者が同時發生の關係にあるが、先に考察した如く、銅利器の初期形態が、明らかにシナ青銅器文化の系統をひくものであり、殊にシナ青銅器文化圏以外に、その發生の考えられない戈が存在する以上、自生的發生はもとより、シナ、或はその他の青銅器文化圏から、青銅技術を導入し、獨自に銅鼓文を共有する兩者を發生したとする考え方は成立しない。次に(2)の場合には、ドンソン文化の發生をシナ青銅器文化の波及によつて解釋しよう

とするもので、銅鼓は、銅利器の發達過程の或時期に發生すると考えるが、初期段階における銅利器に現われる銅鼓文の發生をシナ青銅器文化の中に求めることが出来ないところから、この一元的な考え方に無理のあることが知られる。しかし、B. Karlgren はその論文 “The date of the early Dong-Son Culture”<sup>(33)</sup> において第一型式銅鼓にみられる、圓渦文、圓と接線文、鋸齒文、S字狀渦文、星文など、一群の銅鼓文を、淮河式銅器の文様の中に求め、兩者の示めす所を比較して、その同似から、それも類似要素のみを抽出し、指摘することによつて、オルドス・スキタイ系文化から淮河銅器を経て、初期ドンソン文化への傳播を説いているが、全く異なる形態の遺物を、兩者の微細な文様部分の單なる類似だけを求める方法によること、兩者の關係を論ずる際に如何に危険であり、輕卒なものであるか全く顧みられていない。同時に、銅鼓文の特異性を最も強く示めしている「羽人」の説明が極めて不充分であり、これをもつて、直ちにドンソン文化の起源を淮河式青銅器文化に求めることに賛し得ない。兩者は、その本質において異なるものであつて、兩文化を一元的にみることは、現状においては不可能である。又、梅原末治博士は、これをやはり一元的な發展の中で把握されようとして、ドンソン文化を、高いシナの青銅器文化を受けながら、強い特色を具えた文物を作り出したものと考えられているが、<sup>(34)</sup>石寨山遺蹟の場合、最も初期的段階の銅利器に銅鼓文が置かれているのであり、この種の銅利器が銅鼓に先行したことは考えられない。而して、次の解釋が最も妥當性を備えている。(3)の場合は、銅鼓が、銅利器のグループの發生に先行する。シナ青銅器の波及した初期の段階において、銅鼓文がおかれるのであつて、兩者の銅鼓文の共有は、楚・巴蜀青銅器文化の同地への波及と、その同化、融合の現象として捉らえることが出来るのではなからうか。こゝにおいて、巴蜀・楚のシナ文化は、それ自體融合性をもつて同地の原文化に接觸し、先にみた「史記」西南夷列傳にある記事を、文化現象として、肯定せしめる證左を與えるのである。

雲南地方が中原に知られるようになったのは何時の頃からであろうか。關野雄氏は、殷周の黃河中原の青銅器の大部分の原料を今の雲南方面に求めていたと考えられているが、疑問の存するところである。文化的には、四川、巴蜀の地が、中原の文化的ステーションとして成立してから、はじめて雲南が中原と結びつくようになると考えられる。四川が中原國家に知られるようになり、その支配下に入るのは秦の南進のころからである。秦の巴蜀進入は、約元前三一六年、秦の惠文王後九年の巴蜀征伐をもつてその始めとするが、前二八五年の蜀郡設置以後に至つて、蜀地はほぼ完全に秦の強力な支配下に入る。中原文化の雲南進出は、恐らくこれ以後、前漢代に至つて次第に盛んとなつたようである。「史記」百十六西南夷列傳第五十六に、「巴蜀民或竊出商賈取其笮馬犍僮髦牛以此巴蜀殷富」といつているところなどからみれば、四川、雲南ルートによる交易が相當古くから行われていたことが想像される。漢民族によつて蜀地が安定し、中原の文化ステーションとして、こゝから雲南地方への發展が行われているのである。「史記」卷百十六西南夷列傳第五十六に「滇王者、其衆數萬人、其旁東北有勞浸靡莫、皆同姓相扶、未肯聽、勞浸靡莫數侵犯使者、吏卒。元封二年、天子發巴蜀兵擊滅勞浸靡莫、以兵臨滇、滇王始首善、以故弗誅、滇王離難西南夷、舉國降、請置吏入朝、於是以為益州郡、賜滇王王印、復長其民。西南夷君長以百數、獨夜郎滇受王印、滇小邑、最寵焉。」とあり、前漢の武帝に歸服して滇王の金印を得ているが、石寨山遺蹟から「滇王之印」という蛇紐の金印が出土している。そして移民が送り込まれ、中原の先進文化、技術を持つて農業を促進し、鑛工業を開發し、商業を營み、秦漢帝國の支配を背景として、間もなくそれぞれの場所の支配層として經濟、文化の原動力となつていつたが、「史記」卷一二九、貨殖列傳、蜀卓王孫傳、程鄭傳によれば、「蜀卓氏之先造人也。用鐵冶富。…傾滇蜀之民、富至家僮一千人。…」とあり、前漢武帝の頃には移民の中から臨邛（邛州）の卓氏、程氏などの大富豪が現われるに至つた。彼等が大土地を所有し、多數の家僮、家婢を持ち、



多角的な莊園經營を行なつていたことが知られるが、このようにして構成された社會は、漢人を支配層とし、原住民を被支配層とする複合社會であつたことが推測される。かくて、中原に於ける秦の統一から、それを受けた前漢武帝の漢文化のエキスパンションによつて、特色を失なつた劃一的な漢文化のひろがりを見るのである。それは中原帝國の文化に直接結びついた豪族たちによつて生みだされたものであつた。これを示めすものは漢墓であるが、雲南に於いては、昆明、曲靖、昭通、騰冲等の地區に分布し、中でも昭通、魯甸<sup>(37)</sup>、曲靖、陸涼、昆明等の地に密である<sup>(38)</sup>。一般に高さ三、四米、直徑約五、六米の堆土を施し、アーチ型の單室、或は前後室式の構造を有する磚室がある。遺物には、銅洗、釜、盃、鏃斗、鏡、帶鈎、貨布、五銖錢、鎏金車馬飾具、鐵劍、削、陶竈、俑、碗等があるが、石寨山遺蹟出土の漢代に屬する遺物には、これらと共通するものを多く含んでいる。

## 結 語

石寨山の青銅器文化が、常にシナ文化の強い働きかけのもとに發達したものであることをみてきたが、土着文化と、外來文化としてのシナ文化との接觸の型態が、戰國期における楚、巴蜀文化の場合と、秦漢代における中原文化の場合とは、その性格を異にするものであることが知られる。石寨山の第一型式銅鼓は、ドンソン文化の所産として、二次的に流入した楚・巴蜀青銅器文化に影響を與えつゝ、兩文化の接觸は、楚・巴蜀文化のドンソン文化への融合現象を示めしていることが認められた。而して、當地が中原文化の支配を受け、漢文化が高度な二次的文化として優越的支配關係にたつて、土着ドンソン文化と接觸する過程において、漢代の著しい明器使用の風潮を受けて、銅鼓の明器化が行なわれたものと想定される。銅鼓形飛鳥四耳器、銅鼓形四耳器は、銅鼓の本來の機能を失い、明器として新來の強力な文

化に適應的に發展したものであると考へる。虎耳四足器は、この傾向が一段と推進された過程に發生したものとみられる。明器化した銅鼓の出現は、明らかに、ドンソン文化の衰退であり、ドンソン文化の漢文化への適應、解消の經過を示す現象として捉へることができるのである。なお、このような文化的情況の経緯が、ドンソン遺蹟の様相と極めて類似することを注意しておきたい。

以上、一九五五年以降、二度にわたつて調査された雲南石寨山遺蹟について、最近に於ける活發な中國考古學の現状の一端を紹介し、なお私見を加へつゝ、西南中國におけるドンソン文化の位置について考へてきた。雲南地方が、こゝを中心として四散する揚子江、西江（珠江）、紅河、メコン、イラワディなどの大河の水源域に位置することから、Heine-Geldern によつてオーストロネシア語系諸族の「假想上の故郷」であるとされ、新石器時代末期における方形石斧を伴つた文化、及びドンソン青銅器文化の流れも、雲南を中心に東南アジアの大陸、その縁邊の島々に廣く波及したものであると説かれたために、假想上の文化起源地として、雲南が早くから注目されていたが、その實、考古學的研究が雲南について行われた事は殆んどなかつた。しかし、近年の中國の盛んな研究調査は、着々、雲南地方にも及び、未だ數こそ少ないが新らしい資料を提供してきている。今後の我々の雲南研究は、從來の假說的理論を、これらの新資料を以て、再考し、批判、確證していくことが、今後の大きな仕事になると思う。今度の石寨山遺蹟の發掘は、ドンソン遺蹟に比すべき重要な意義を認めるものであり、今後、東南アジアに於ける考古學研究にとつて、缺く事のできない、重要な遺蹟として、益々注目されなければならぬ。（一九五九・一・三〇稿）

註(1) 松本信廣「雲南に於ける考古學上の發見」民族學研究 第20卷第3・4號119頁。

(2) de Groot, Die antiken Bronze-Pauken im ostindischen Archipel und auf dem Festlande von Südostasien (M. S. O. S. B. 1904) 史學雜誌第13編 坪井九馬三譯。

- (3) F. Hirth, Chineseische Ansichten über Bronze-Trommeln (M. S. O. S. B. 1904)
- (4) V. Goloubew, L'âge du Bronze au Tonkin et dans le Nord-Annam (B. F. F. E. O. XXIX 1929)
- (5) F. Heger, Alte Metalltrommeln aus Südost-Asien. Leipzig, 1902
- (6) Heine-Geldern, Bedeutung und Herkunft der Metalltrommeln (Asia Major, Vol. VIII, fasc. 3, 1932)
- (7) B. Karlgren, The date of the early Dong-Son culture. (M. F. E. A. Bulletin No. 14, 1942)
- (8) 小林知生「佛領印度支那東京平野の古文化―特に所謂ドンソニアんに表われたローカル要素の時代觀に就て―」考古學雜誌 26 卷11號 昭11・11
- (9) 文中の「ドンソン文化」は、ドンソン遺蹟の文化の意味ではなく、廣く東南アジアに廣がる銅鼓をメルクマールとする青銅器文化の意味で用いる。
- (10) 「雲南晉寧石寨山古遺址及墓葬」雲南省博物館考古發掘工作組(考古學報一九五六年第一期。一九五六年三月)
- (11) 陳朋琮、馬德嫻「雲南晉寧石寨山古墓群清理記」(文物參考資料一九五七年第四期、一九五七年四月)
- (12) (5)參照。
- (13) 聞宥編著「古銅鼓圖錄」(一九五四年十一月)
- (14) 李家瑞「古代雲南用具幣的大概情形」(歷史研究一九五六年第九期)
- (15) (4)・(18)參照。
- (16) 「長沙發掘報告」(中國田野考古報告集考古學專刊丁種第二號 中國科學院考古研究所 一九五七年八月)
- (17) (4)參照。
- (18) O. Janse, An Archaeological Expedition to Indo-China and the Philippines. (Harvard Journal of Asiatic Studies Vol. 6, No. 2, 1941)
- (19) 黃展岳「近年出土的戰國兩漢鐵器」(考古學報一九五七年第三期、一九五七年九月)
- (20) 山本達郎「タイ國、雲南省及び東京地方出土の數種の青銅器に就いて」(東方學報、東京第十冊之二、東方文化學院、昭和十四年十二月)

- (21) 馮漢驥「四川古代的船棺葬」(考古學報一九五八年第二期、一九五八年六月)
- (22) 沈仲常「記四川巴縣冬筭霸出土的古印及古貨幣」(考古通訊第六期一九五五年十一月)
- (23) 四川省文物管理委員會「成都羊子山第一七二號墓發掘報告」(考古學報一九五六年第四期、一九五六年十二月)
- (24) (8) 參照。
- (25) O. Jansse, Un Groupe de Bronzes Anciens Propres à l'Extrême-Asie Méridional. (M. F. E. A. No. 3, 1931)
- (26) (4) (18) 參照。
- (27) 和田清「瀆王莊躡故事」(羽田記念「東洋史論叢」)
- (28) O. Jansse, Note sur quelques épées anciens trouvées en Chine. (M. F. E. A. No. 2)
- (29) 駒井和愛「南支那の石器及び青銅器に就て」(人類學先史學講座第八卷)
- (30) 久村因「楚秦の漢中郡に就いて」(史學雜誌第六十五篇第九號一九五六年九月)
- (31) 久村因「古代四川に土着せる漢民族の來歴について」(歷史學研究二、一九五七年二月)
- (32) 秦鳳翔「再論白語的系屬問題及白族的形成和發展」一九五七年五日(「雲南白族的起源和形成論文集」所收) 雲南の白語が、少數の助動詞、副詞、量詞をのぞいて韻、半鼻音などが、中南シナの方言と類似していること、白語の主要素と湖南、江西、江蘇、浙江省などの方言(古東楚、南楚)とが親屬語であり、古楚語を基礎とし、それに古蜀語の要素を混合したものであることを指摘している。
- (33) (7) 參照。
- (34) 梅原末治「北部佛印の青銅器時代について」(史林第三十二卷第一號、昭和二十三年十月)
- (35) 關野雄「中國古代の金屬文化」(歴史教育第五卷三號)
- (36) 關野雄「中國初期鐵器文化の一考察」(史學雜誌第六十篇第十號)
- (37) 曹韻葵「雲南昭通專區的東漢墓清理」(考古通訊一九五七年第四期)
- (38) 孫太初「在雲南考古工作中得到幾點認識」(文物參考資料一九五七年十一期)